

# 伝える 受け継ぐ @乙訓

④ 造る

## 長岡京の作業場で弟子を指導する 能見 太郎さん(40)＝京都市西京区大原野

洛西



西山が雪化粧した昨年12月上旬の朝。長岡京市井ノ内の作業場で、親方の能見太郎さん(40)＝京都市西京区大原野＝は、梁に使う天然木のマツと向き合っていた。「何をコンコン言わしとんねん」。弟子の打つ金つちのリズムがきこえない。いてつく空気が一層張り詰めた。

今月下旬のモデルハウスの棟上げに向け、材木の加工が続く。裁断線や接合部の目印を記す「墨付け」。墨に従って削り込む「刻み」。昔ながらの大工仕事がある。

夜間大学に通いながら解体業者で働き、21歳で長岡京市内の工務店へ弟子入り。10年後に能見工務店を創業し、伝統的な工法による家造りを追求する。

コンピューター制御で材木を機械加工するプレカットが主流の今、建築工程は大幅に簡略化された。その影で家造りの根幹を成す技術は失われつつあるという。大工人口は三十数年で4割以下に減った。

マツに墨付けを始めた能見さんが、幹の湾曲部に差し金を当て、直線を引く。材木を狂いなく組み合わせるための要の難作業。何度も手を止め、息を吐く。

刻みを担当する一番弟子の高橋英樹さん(36)＝高槻市＝が、神経を研ぎ澄ます能見さんを見つめた。金物店勤務の18歳の頃、建築現場で能見さんと出会った。独立後の仕事に関わり「ゼロから家を生み出す姿が大工の理想像と重なった」。31歳で弟子入りした。



## 大工の技 なくしたくない

1年半前、店舗付き住宅の墨付けを任されたことがある。組み立ての段階で材木の長さや接合部の印にズレが判明。肝を冷やした。「俺の技をしつくり見直せ」。それが、今回の役割分担に込められた能見さんからのメッセージと受け止める。

「技術は伝えないと消えてしまう。大工をなくしたくない」。能見さんは願う。独立後、計6人の弟子を抱えたが現在は2人。手間がかかる伝統的な工法は一人だと施工数に限りがある。定着を目指し、社員として安定した身分を保障しようと準備している。

朝、金つちの使い方などでやされた長谷川琉斗さん(15)＝伏見区＝は、通信制高校に月2回通う傍ら、弟子入りして半年。最近、少しずつ刻みに加わるようになった。中指と薬指の関節には金つちの握りだこができた。

マツの墨付け中、能見さんは補助に長谷川さんと呼んだ。「見せるためにそばに置いたが、横を向いていた。まあ、ゆくゆく分かっていく」。手取り足取りは教えない。でも、やる気を引き上げるのが務めと考えている。

長谷川さんにとって、大工は小学生時代に憧れた職業。「他の人ができひんようなことがしたい。お金より技術を覚えたい」

親方の存在とは？  
すぐに答えが返ってきた。「僕を育ててくれる人です」

(本田貴信)

＝次回は9日付に掲載します



⑤湾曲する天然木のマツに墨付けを施す能見さん(長岡京市井ノ内)  
⑥刻みの作業を進める高橋さん(右)と長谷川さん